

2023年
3月27日 No.1696



週刊 教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryo.co.jp>



潮流

生き方を選べる力を育てる

一般社団法人Bridge for Fukushima代表理事 伴場賢一[㊦]

資料

通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議報告

——同検討会議

CONTENTS

▶ 2 潮流

生き方を選べる力を育てる

伴場賢一(一般社団法人Bridge for Fukushima代表理事)[㊦]

▶ 5 解説・ニュースの焦点

○第12期中教審がスタート

○次期教育振興基本計画を答申——第11期中教審

編集部

▶ 8 特別企画

栄養教諭配置や活用の課題は?

編集部

▶ 10 校長講話

「大器晩成」学び続ける姿を生徒に見せる

松原好広(松本大学教育学部准教授、東京都江東区立大島南央小学校元校長)

▶ 12 生涯発達時代のよくなる!発達障がい入門

高等学校における特別支援教育の現状と課題②

一入試での合理的配慮と学びの場の拡充—

水内豊和(帝京大学文学部心理学科准教授)

▶ 14 君たちが18歳になる前に

歴史に学ぶことの意義

安藤 博(子ども法学者)

▶ 16 実践! 校長塾

校長としての心構え

植村洋司(東京都中央区立久松小学校校長)

▶ 19 資料

通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議報告

同検討会議

▶ 35 教育問題法律相談

信仰上の理由から校歌を歌えないと言われたら

澤田 稔(弁護士)

▶ 36 学校事務新時代

教職員の働き方改革①

「働く場改革」で環境をつくり直そう

上部充敬(横浜市立日枝小学校学校事務職員)

▶ 38 学級・授業づくり 虎の巻

異動が決まったら、異動先ですべきこと

依原正仁(兵庫県芦屋市立山手小学校校長)

▶ 40 管理職養成 教頭実務ガイダンス

新しいステージに向けて

井部良一(全国公立学校教頭会事務局長)

▶ 42 高校現場最前線

学校が変わった二つの契機

宮島忠史(島根県立津和野高等学校校長)

▶ 44 現場の課題に応える教育機関

「気づき」につながる情報で、悩める先生を支える

塩畑貴志(NPO法人教員支援ネットワークT-KNIT代表理事)[㊦]

▶ 46 先生に知ってほしい 困っている子どもたちのこと

ICTの活用と困っている子どもたち

高畑進一(京都橋大学健康科学部特任教授、一般社団法人日本COG-TR学会監事)

▶ 47 BOOK

『最新教育動向2023』

必ず押さえておきたい時事ワード60&視点120』

『「ふるさと創生」学びと結 開拓者精神の復権』

京都 神戸 遠野・住田からの問いかけ』

▶ 48 自著を語る

『千葉からほとんど出ない引きこもりの俺が、一度も海外に行ったことがないままルーマニア語の小説家になった話』

濱東鉄腸(映画ライター、作家)

▶ 51 品川裕香の共感教室

「教師の質が低下した」との言葉を聞くが……

品川裕香(教育ジャーナリスト)

▶ 52 マイオピニオン

変わらないことの改善と工夫

二宮清純(スポーツジャーナリスト)

▶ 別冊・教育小辞典 上巻

リーダーのための最新教育キーワード(令和5年)

高等教育、科学技術・学術、国際教育、文化・芸術、総合教育政策

潮流

一般社団法人Bridge for Fukushima代表理事

ばんばけんいち
伴場賢一さんと聞く



撮影:Owl 李春湖

1970年福島県生まれ。大学卒業後、銀行員として勤務したのち、国際NGO・国連やJICAなどの国際機関でカンボジア・ザンビアなどの途上国の開発援助・緊急救援活動に従事。これらの経験を活かし、東日本大震災後は福島の復興に取り組む。

生き方を選べる 力を育てる

福島県内の高校現場と連携しながら
「探究」の学習などを通して
生徒が将来の生き方の選択肢を広げる
「仲介」の役割を果たしたい、という。

若者は根拠のない自信を

——伴場さんが、高校生や大学生など若い世代と接してきたことで、感じたことは何でしょうか。

伴場 よく「根拠のない自信が持てるのが若者の特権」といわれますが、そのためには失敗しても構わない環境や大人からの励ましが必要だと思います。日本の若者は外国の若者に比べて自信を持つ人の割合が低いなどと言われますが、学校教育だけでなく地域の人間が若者を「褒める」などしてサポートする環境が、日本では弱いのかもしれません。

社会や人に迷惑をかけるような「失敗」は避けるべきと思いますが、自分だけの「失敗」経験は、むしろ、そこから学ぶことができる、成長の機会にもなります。ところが、学校教育も含めて、今の若い人は「失敗してはいけない」と思い込まされている状況があるように感じています。

——高校生が自信を持てるように働きかける際に気をつけていることはありますか。

私たちの団体は地域のインフォーマルな教育機関として、高校生が主体となるさまざまなプロジェクトに奔走してきました。私たちが大切

にしていることは、「偉いね」「よくやったね」と漫然と褒めるのではなく、その子どもが持っている「強み」を自覚させる、ということですね。例えば、私たちの事務所には放課後に高校生たちがやってきて、プロジェクトについていろいろと話し合うなどしていますが、人の話をよく聞いて、うなずいているけれど、積極的に発言しない子どももいます。もしくは発言の数は少なくとも全体を俯瞰し、大事な場面で「こうなのでは」と一言発することで会議の方向性を正しい方向に向かわせることができる学生もいます。

その学生は「自分はみんなのように、リーダーシップは取れない」と自己評価はあまり高くないのですが、各自それぞれに強みや個性があり、議論を前進させる役割を果たしていることを自覚してもらいたいです。高校生対象のプロジェクトはあくまで、そうした資質などを育成する手段であって、最終的には、高校生が社会に出たときに活躍できたり、社会を良くする活動に参加できたりするようになることを目的としています。

高校生向けのプロジェクトを最初に経験した高校生たちは、現在は25歳前後になっていますし、高校生たちをサポートしていた大学生も30

歳前後になっています。いまだに、県外から福島に帰省したとき、福島駅の近くにある当団体の事務所に顔を見せて、近況を報告してくれました。こうした若い世代が社会や地域で成長している姿を、卒業生として送り出した高校の先生方にも知ってほしいと思います。

学校との連携した事業も

——高校では「探究」などの時間が始まっていますが、学校と連携した事業もあるのでしょうか。

伴場 高校生が自主的に参加するプロジェクト事業を行ってきましたが、現在は、その次の段階として、学校と連携した活動が始まっています。福島県教育委員会や基礎自治体との連携により、福島県内では7校程度の県立高校の職員室に、地域コーディネーターとして常時、私たちが関われるように専用の席を設置していただいています。

私たちが、インフォーマルな教育機関の一つとして推進してきた高校生向けのプロジェクトベースの学習は、「総合的な探究の時間」にとっても近いものですし、ここ数年間は学校の現場と連携して活動が広がっています。

ただ、公教育との連携では、これまで私たち

の活動に自主的に参加していた能動的な高校生たちだけでなく、高校に在籍する全ての生徒が対象になるので、最初は、「おとなしい印象の生徒」の姿に、やや戸惑った面もありました。——そのような場合は、どのように考えていますか。

伴場 現在の学校、特に高校の場合は、学力という一つのモノサシによるヒエラルキーに生徒も先生も縛られている面があるように感じています。私たちの活動に高校生の頃から参加している子どもの中には、学力面だけでなく、社会との関わりなども真剣に考えて、国内だけでなく海外の有名な大学などに進学する子どもも一定数いますが、そのような子どもたちでもテストの点数による一面的な評価のために自分に自信が持てないという悩みを抱えた子どもがいます。

これからの「共創型」の社会では、「自分の強み」を知って、仲間と協働しながら、社会にとつてより良い成果を挙げられるように努力するという姿勢を育てることが大切ではないでしょうか。ですから、そのような子どもを育てる立場の学校の先生方も、その子どもたちの強みや特徴を生かして、「探究」の活動を進めていくと良いのでは、と思います。

——そのためには、今までの指導の在り方を見直す必要がありますか。

伴場 今までのやり方を否定するのではなく、「探究」などの活動を通して、新しい学校や教育の在り方を探っていくという前向きな姿勢が必要ということではないでしょうか。学習指導要領上で教育のカリキュラム内容として「探究」が位置付けられていますが、それ自体が目的ではなくて、あくまで「手段」であること、生徒の成長につながった探究の事例を基に、より良い「探究」の在り方を模索していくことが必要では、と思います。これは、マネジメントの問題でもありますので、ファシリテーションなどの経験が豊かな外部の団体を有効に活用してほしいと思います。

生き方を選べる力を育てる

——探究型の学習に期待していることは何でしょうか。

伴場 会社組織の場合、さまざまな強みを持つ人が互いにその強みを発揮しながら事業を進めていくという面があります。プロジェクトをゼロから作るのが上手な人もいれば、その運営に長けた人もいます。管理が得意な人もいれば、お金の計算が上手な人もいます。その点か

らすると、学校という組織は、教科や担当が固定されており、個々の先生方の特性や強みが発揮しづらい面があるように思います。

最近、欧米などで注目されている教育プログラムにSocial Emotional Learning (SEL) : 社会性と情動の学習 というものがあります。自己理解や社会性、共感力、感情制御力を育てるための学習や体験を行うことで、自尊感情と対人関係能力を育てるといいますが、私たちが学校外で進めてきたインフォーマル・エデュケーションととても近いものです。

特に、自己理解や自分の得意なこと、「強み」を知れることは、自分の将来の生き方を選ぶ力につながります。自分がやってみたいことの根源には何があるのかを知っておくことも、セルフマネジメントには欠かせません。私の場合、「不公平なことは嫌いだ」という気持ちが若い頃から強く、途上国支援の仕事を選ぶことにつながりました。

——学校の先生たちの強みは何でしょうか。

伴場 学校の先生方の強みは、生徒の様子や見て、適切なアプローチができるということ、さすがに教育のプロだな、と思います。先ほどのSELでは、他者の理解や人間関係をつくっていく力などの育成にも力を入れています

が、学校の先生方が得意な面を生かしながら、「探究」の時間などに、このSEL的な考え方を取り入れていくのはどうでしょうか。今までの教科教育では弱かった部分ですし、これからの社会には求められる教育だと思います。

ただ、こうした教育は学校だけが現在のリソースだけで抱え込んでも成果を上げにくいのではないのでしょうか。教育の目的が人々の幸せにつながることにあるとすれば、その選択肢を見つれたり、自分で選択できる力を育てるたりすることが、教育の仕事だと思えます。

その意味では、「探究」の時間などで、生徒の視野を広げるために、地域で活動しているさまざまな団体や個人を学校につなげる「仲介役」として、私たちの団体を活用していただいて、先生方の負担をなるべく減らすことになればと思っています。

一般社団法人Bridge for Fukushimaのプロジェクト = <https://bridgeforfukushima.org/projects/>

